健康社会学研究会

ニューズレター　No.64

発　行：健康社会学研究会
事務局：〒170-8445 東京都豊島区東池袋 2-51-4　帝京平成大学 現代ライフ学部 人間文化学科（担当 森川洋）
TEL 03-5843-4841　FAX 03-5843-3297　E-mail：h.morikawa@thu.ac.jp
ニューズレター NO.64／2012 年 1 月　編集担当：渡辺多恵子

新年のごあいさつ

2012 年、皆様におかれましてはどのような新年をお迎えでしょうか。初心者マークの運営委員ですが、僭越ながら新年のご挨拶をさせていただきます。

昨年の 3・11、未曽有の大規模災害が日本を襲いました。私もまさかの帰宅困難、コンビナート火災、液状化の目撃などを経験し、皆様同様忘れることのできない 1 年となりました。多くの尊い命が失われ、故郷が失われ、日常が奪われた 2011 年の漢字は「絆」でした。過去大きな災害や事件が起こった年は、「震」「毒」「戦」「災」などマイナスイメージの一文字が選ばれていることが多かったのですが、昨年は大規模な災害の経験から家族や仲間など身近な人々との「絆」を感じ、一丸となり乗り越えていこうという、復興に向け明るい兆しを感じる一文字となりました。とは言え、本当に日常が戻ってくるのにはかなりの年月がかかることでしょう。そして、いつまた私たちの日常が奪われるのか今度こそ「想定」しておかなければなりません。当たり前の幸福な毎日、そんな健康社会の実現と維持を目指して、みんなで幸福の種を広めていけるよう、この歴史ある研究会が社会により貢献できるよう微力ではありますが、努力を重ねていきたいと思います。

国民総幸福量（GNH：Gross National Happiness）とは、皆様ご存じのとおり、昨年ワンチュク国王夫妻が来日して話題となったブータンの国民全体の幸福度を示す尺度です。2005 年に行われたブータン政府による国勢調査で「あなたは今幸せですか」という質問に、45.1%が「とても幸福」、51.6%が「幸福」と驚異の回答をしています。GNH は、①心理的幸福②健康③教育④文化⑤環境⑥コミュニティ⑦良い統治⑧生活水準⑨自分の時間の使い方の 9 つの構成要素から成っています。他者とのつながり、自由な時間、自然とのふれあいなどが人々の健康で心豊かな暮らしに繋がっていくようです。中国ではこの「幸福指数」を政策目標にかかげるケースが相次いでいると言います。今まで信じてきた価値観が覆されていく昨今、人口 70 万人弱のこの国に学ぶべきことは計り知れないのではないでしょうか。（個人的には、⑨自分の時間の使い方、これがいちばんきびしいかな…）

さて、2012 年いちばんの明るい話題は、墨田区に東京スカイツリーが竣工することです。自立式鉄塔としては世界一となる高さ 634m の展望タワーで、下町にど～んと存在感を示しています。「Think global , Act local」地球的な視野で考え、地域で（身近な）行動せよ。この言葉を胸に刻みながら、2012 年、まずは自分が「幸福」と思える年になるよう、一日一日を大切に、これからの学び、出会いにワクワクしながら過ごしていきたいと思います。皆様にとりましても、輝かしい 1 年となることを願いまして新年のご挨拶とさせていただきます。

（健康社会学研究会 運営委員　高澤みどり）

３月 月例会のご案内

日　時：平成 23 年 3 月 10 日（土）15:00-17:00（受付 14：30-）
場　所：日本子ども家庭総合研究所 会議室
参加費：会員/無料　非会員/1,000 円

【 テーマ・報告者 】

● 第一部：文献検討を通したヘルスプロモーションの動向
　栄養分野から　池田康幸（三芳町健康増進課）
　歯科分野から　高澤みどり（市原市保健福祉部保健センター）

● 第二部：研究報告
「携帯電話を用いた 生活習慣病予防を目的とする行動変容の継続支援プログラムの有用性
　―傾向スコアマッチング法による検証―」
　下園美保子（山梨大学大学院医学工学総合教育部社会医学講座）

※ 研究会終了後、懇親会を広尾駅周辺で開催します。

第 70 回日本公衆衛生学会総会自由集会 報告

テーマ：ヘルスプロモーションによるまちづくりの事例集をつくろう
報告者：小竹桃子氏（東京都荒川区保健所健康推進課 課長）

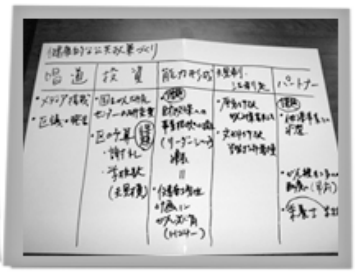
去る 10 月 19～21 日、秋田県県民会館ほか 2 会場において第 70 回日本公衆衛生学会総会が開催され、その 2 日目（10 月 20 日）に毎年恒例の健康社会学研究会による自由集会が開催されました。今年は、東京都荒川区保健所健康推進課の小竹桃子課長をはじめ 4 名のスタッフから小学生を対象としたがんの出前授業についての事例報告が行われ、その後参加者の皆さんと一緒にヘルスプロモーション活動の視点から当該事例を分析する作業を行いました。

まず､荒川区の事例報告者らからは､「がんのこともっと知ろうプロジェクト～寸劇による出前授業までの道のり～」と題し、東京都 23 区中の荒川区の健康状態の懸念等、独自のがん予防・健康づくりセンターが設立された背景についての説明があり、度重なる人脈形成や、小学校での健康教育を通じて形成されたスタッフのエンパワメントの様子、事前事後アンケートの結果および波及効果など、一連のプロセスについてのご報告がありました。

次に、助友から「ヘルスプロモーション事例分析のポイント」と題した話題提供として、国際会議を通じたヘルスプロモーション概要のおさらいをした上で、荒川区の事例分析の一例を紹介させていただきました。ヘルスプロモーション活動を包括的にとらえるためには多大な労力を要し、信頼性・妥当性の検証も困難であることを仮定した上で、5 つの活動方法それぞれにおける 5 つのプロセスを検討することを提案しました。通常、疫学や健康教育学分野では、確立された方法論がありますが、健康社会学研究の方法論を考慮した場合、包括的な概念枠組みの設定がまず必須ではないかと考えました。オタワおよびバンコク憲章で示された枠組みは大変有用な示唆を含むものではないかと思います。

最後に、フロアでは「健康的な公共政策づくり」「健康を支援する環境づくり」「地域活動の強化」「個人技術の開発」「ヘルスサービスの方向転換」それぞれをテーマとする 5 つのグループに分かれ、各グループで「唱道」「投資」「能力形成」「規制と法制定」「パートナー」といった 5 つのプロセスの観点から荒川区の事例において「すでにされたこと」「これからできること」を検討しました。その結果を別添に示します。（グループでメモされた言葉をそのまま転記しております。）活動方法を超えて各プロセスに共通事項が見られることが分かり、荒川区の活動において無意図的に有機的連携が図られていることが理解できました。

このような事例分析を通じてヘルスプロモーション活動の理解を深めると同時に、健康社会学研究方法の一例としても検討を蓄積することで、系統立てたヘルスプロモーション活動事例集を提示することが可能となるのではないでしょうか。今回の自由集会テーマ「・・・事例集をつくろう」にはそのような思いがこめられておりました。会員の皆様から忌憚のないご意見・ご示唆をいただけますと幸いです。



（健康社会学研究会 運営委員　助友裕子）

参加者の声

「学校予防接種を体育館や保健室を利用し集団で行うということは、予防接種の重要さを次世代につなげる健康教育の意味合いもある」という内容の講演会報告集を読んだことありますか。体育館や保健室に一列に並び、自分の順番をドキドキした気持ちで待ったり、子ども同士が予防接種について話したりすることなどが、後の予防効果さらに接種率の向上を見込めるという内容のようです。私も人伝に伺った話で資料まで確認できていなく恐縮ですが、今回の自由集会に参加してターゲットや内容は違えど「この話に似ているな～」とまず感じました。

そして驚かされたのは、このプロジェクトに大勢のスタッフが関わったということ、またそのスタッフ同士の点を線で結んだ専門職がいたこと、さらにチーム一丸となって目標に突き進んだということ。ほんの数十分では語りきれない思いが power point に隠れているように思えました。何気ないひとことから事業が大きく展開する、そんな想いが詰まった内容でした。

地域、学校、研究者をはじめいろいろな人がつながり、一つの目標に向かう力強さ。そしてコーディネートの大切さを感じた 2 時間でした。

（埼玉県三芳町 管理栄養士　池田康幸）

第 47 回 健康社会学セミナー報告

日時：平成２３年１１月２６日（土）　１３時～１７時１０分
場所：日本子ども家庭総合研究所３階　第１会議室
テーマ：ヘルスプロモーションによる活動分析の可能性を探る

第一部：文献検討を通した各分野におけるヘルスプロモーションの動向
　助友裕子・斉藤恭平（ヘルスプロモーション）
　松岡正純（健康なまちづくり・健康文化都市・健康）等
　杉田秀二郎（ヘルスプロモーション・健康教育）
　臺有桂（ヘルスプロモーション・保健師）等
　白子純子、鈴木　茜、渡辺多恵子（子ども・ヘルスプロモーション）
　森川　洋（ヘルスプロモーション・地域福祉）

第二部：事例をもとに活動分析
　１．ヘルスプロモーション活動の分析方法
　　話題提供：助友裕子（国立がん研究センターがん対策情報センター研究員）
　２．事例分析（グループワーク）
　　①しろい健康プランの策定（事例提供：松岡正純）
　　②保健部門と幼稚園の連携による幼稚園児健康教育（事例提供：臺有桂）
　　③ＮＰＯ法人自立支援ネットワーク茨城障害者雇用支援センターにおける
　　就労移行支援事業の活動内容及び課題の検討（事例提供：森川　洋）
　３．グループ発表・意見交換

［これまでの研究会活動］

日本におけるヘルスプロモーションは、1990 年代中頃から厚生省（現：厚生労働省）が政策展開した「健康文化都市構想」によって脚光を浴びることとなりました。しかし、2000 年からスタートした『第３次国民健康づくり運動「健康日本２１」』では、壮年期死亡の減少や健康寿命の延伸などを目的とし、その目標項目は生活習慣病に特化した範囲とされました。これを契機に、全国自治体の健康政策は、疾病対策に焦点が移され、WHO が提唱するヘルスプロモーションによる政策展開が足踏みしてしまう結果を招きました。これまで研究会ではセミナーなどを通じて、ＷＨＯによるヘルスプロモーションの日本的展開の必要性を唱えてきました。

そのような中、去る 10 月に健康日本 21 の最終評価が厚生労働省から発表されました。目標値の達成は全体の 16.9%にとどまり、悪化した項目も 15.3%と、多くの課題を残した政策といわざるを得ない状況です。研究会では、ヘルスプロモーションの視点から会員による研究・調査・実践成果を持ち寄り、書物として世に送りだし、健康日本 21 の底流にある疾病対策からヘルスプロモーションによる政策転換の必要性を訴えていきたいと考えています。

［セミナー企画にいたる取り組み］

7 月に湯浅准教授（順天堂大学大学院医学研究科）からヘルスプロモーションのオタワ憲章から現在までの動向について解説いただき、改めてヘルスプロモーションの考え方と意義について理解を深めま

した。（ニューズレター62 号参照）その後、日本公衆衛生学会自由集会において、臺由桂副代表と助友裕子運営委員らが中心となり、ヘルスプロモーションの 5 つのキーワードと 5 つの活動をもとに、自治体でのプロジェクトをもとに、ヘルスプロモーション活動についてグループワーク形式にて参加者と共に分析を試みました。（本ニューズレター参照）

［第 47 回セミナー企画］

本セミナーにおいても、こうした取り組みの延長線上に企画を位置づけ、第一部では運営委員が専門とする各分野において、ヘルスプロモーションがどの程度取り上げられているか、文献レビューによりその傾向を明らかにすることとしました。

第二部では、運営委員が 3 事例を提供し、自由集会で実施した活動分析をグループワーク形式で実施し、ヘルスプロモーションの視点から改めて活動を考えることで、更なる理解を深めることとしました。

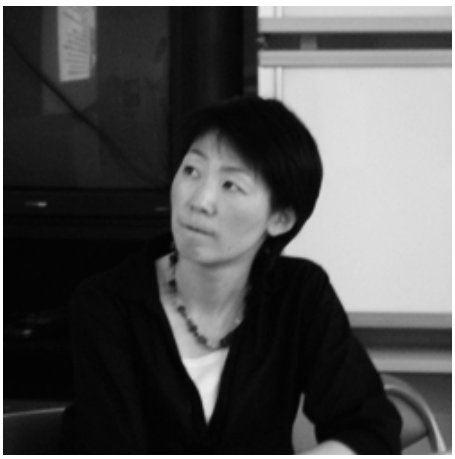
［第 47 回セミナー概要］

第一部：：文献検討を通した各分野におけるヘルスプロモーションの動向

フロアからの意見（抜粋）

- 助友さんの①対象、②研究デザイン、③ヘルスプロモーション活動方法、④ヘルスプロモーションのプロセス、の分類はおもしろい。
- 文献検索は、少なくともプライマリ・ヘルスケア（1978 年）頃から現在までの経過を見ていく必要がある。
- 原著レベルとはちがい、学会発表レベルで学会抄録集から傾向を見ていくと細かな傾向が見えてくるのではないか。傾向を分類し、特徴を明確化できると良い。
- ヘルスプロモーションが単なる言葉だけで取り扱われたり、健康づくりとの意味で使用されたり、どのように取り扱われているかを把握するためには、論文にしっかり目を通す必要がある。
- 外国文献（ヘルスプロモーション）、食や歯科の分野も文献検討していく必要がある。

第二部：事例をもとに活動分析



1．ヘルスプロモーション活動の分析方法

話題提供：助友裕子

（国立がん研究センターがん対策情報センター研究員）

ヘルスプロモーション活動分析
メリット… 包括的なヘルスプロモーション活動の確認
第三者評価になる
多彩な実践家によるグループワーク
デメリット…信頼性は未確立、多大な労力を要する

2．事例分析（グループワーク）

1) しろい健康プランの策定（事例提供：松岡正純）

2) 保健部門と幼稚園の連携による幼稚園児健康教育（事例提供：臺 由桂）

3) ＮＰＯ法人自立支援ネットワーク茨城障害者雇用支援センターにおける就労移行支援事業の活動内容及び課題の検討（事例提供：森川 洋）

3．グループ発表・意見交換

・活動の主体をどこにおくかによって表現が異なる。
・状況把握やグループワークに時間を要する。
・事例紹介が抽象的だとグループワークが難しくなる。
・事例紹介者は、あらゆることを把握している人が説明する必要がある。
・事例は政策レベルだと規模が大きく、事業レベル程度のものが説明しやすい。
・プロセスと活動方法をわかりやすい言葉で表現できるといい。
・活動分析はあくまでも活動レベルとして統一する必要がある。
・単なる穴埋め作業にならないように注意を要する。
・すべてのマトリックスに当てはめなければならないということはない。
・取り組みの事前評価・中間評価・事後評価に使える。
・外部による第三者評価、内部でのアイディアだし・企画会議などにも使える。

結びに

事例をもとにワークシートを用いたグループワークは新鮮な体験でした。しかし、体験を通じて出された課題もあり、今後は課題の改善を検討しながら、ワークシート活用によるグループワークを有効なものとし、ヘルスプロモーション活動に結び付けられるようにしていくことが大切であると感じました。

（健康社会学研究会 代表　松岡正純）

共催事業報告

社会変革のためのコミュニケーションセミナー

日 時：12 月 7 日（水）18 時 30 分～20 時 30 分
会 場：順天堂大学医学部公衆衛生セミナー室
テーマ：「社会変革のための Entertainment Education」
講 師：Arvind Singhal 博士（ﾃｷｻｽ大学ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学部教授）
通訳・モデレーター：河村洋子先生（熊本大学政策創造研究教育センター准教授）

今回のセミナーは、主催が順天堂大学医学部公衆衛生学講座、熊本大学政策創造研究教育センター、共催として健康社会学研究会、国際保健と開発勉強会、日本ヘルスプロモーション学会国際協力部会・健康社会学研究部会により、エンターテイメント・エデュケーション（EE）の分野を牽引している世界的な研究者として著名な Dr. Singhal をお招きし開催されました。EE は、インドやインドネシアなど農村で生まれ、アメリカ等先進国で方法論として成熟したヘルスプロモーションに基づく健康教育アプローチのひとつであり、国際協力、ヘルスなど、様々な分野への応用が期待できるもので、アプローチにより地域全体が変革することを狙いとしているそうです。Dr. Singhal は、開発途上国における HIV/AIDS 蔓延、女性の低社会的地位、子どもの人身売買など、解決のためには社会的な変化が必要な課題について、コミュニケーションの理論と方法を用い、実践的な研究に取り組まれています。今回は具体的な 3 つの事例を提示しながら、EE の手法や魅力について述べられました。

Dr. Singhal より、事例を通じて EE について以下のことをお話いただきました。

- EE は、社会的課題、健康問題、衝突等々の問題を克服できることを、事例を通じて見せる。そのことにより問題を解決へ導くことができる。
- 社会規範・暗黙のルールを変えるには、主体となる人を巻き込み、現実をリサーチしたうえで戦略を立てて届けたいメッセージを作り上げ、メディアを活用することにより、ディスカッションする場を散りばめていく。EE は、どのような課題（個人の健康課題、家族の健康課題、コミュニティの健康課題などの複雑な課題）であっても、社会的課題に対する新しい話しを作り上げていくことから、可能性を引き出すものである。
- EE による物語は、真実以上の可能性のあるものにする必要があり、今ある事実を物語で表した後、その先にある可能性を示していくことが必要である。物語により、各個人が吸収して学び、新たな行動ができるようになる。何かを変化させたいとき、物語を変えていくことが必要であり、それができるのが EE である。
- EE を展開するうえでは、あらゆるリソースの活用が重要である。インドでの事例では、国営ラジオというマスコミを活用した EE の展開がされているが、色々な分野を巻き込みコラボレーションすることが重要である。マスコミの活用に向け、あらゆるところから協力者をつくることも必要である。そのためには、エンターテイメントという娯楽の特徴を強みにしてスポンサーをつけていくなどの工夫も必要である。双方にとって新しい可能性を求め、物語の中に戦略を盛り込み可能性を広げていくことにより、色々なものを取り込むことができるのである。
- EE は、1960～70 年代から開始されていて、積み上げられてきており、技術もすすんできている。可能性を秘めたものであり、あらゆる分野とのフュージョンによって、色々な国で実践されている。どのような人、どのような分野でも活用できるため、ぜひ EE の手法を課題解決のために多くの人に活用してもらうことを願う。

ヘルス分野で活動する地域保健師として、地域の健康課題を改善・解決するために、EE の活用が大変有意義であることを学ばせていただきました。健康情報をストレートに出すとうまくいかない場合もありますが、エンターテイメントを前面に出しながら健康情報を盛り込んでもらうというバランスをとる工夫など、EE による可能性があることもわかりました。保健活動を展開するうえで、日常業務での EE の要素を取り入れた健康教育を取り入れるだけでは事業参加者に限定されてしまうため、いかにリソースを活用して地域全体に広めていくか、それが今度の可能性拡大につながるものと感じました。

今回のセミナーでは、大変貴重な、EE の学ぶべき要素をうかがうことができました。本セミナーを企画してくださったすべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

（健康社会学研究会 運営委員　鈴木茜）

当事業は、本年度の事業計画に位置づけておりませんでしたが、運営委員会において講演テーマと企画内容が研究会の活動趣旨に沿うという判断のもと、共催事業と位置づけ実施いたしました

事務局より

１．会費 3 年以上未納について

以下の方（敬称略）は、21、22、23 年度の会費が未納です。
未納の場合、退会扱いとなりますので、ご注意ください。
　金子元彦　温泉美雪　（敬称略）

２．平成２３年度会費納入のお願い

毎年会費の納入についてご協力頂きありがとうございます。今年度も同封の払込票、もしくは銀行振込にて平成 23 年度会費の納入をお願いいたします。

＜会費納入先＞
郵便振替：００１００－８－４１０２５
銀行口座：みずほ銀行広尾支店　普通　１８４２１２２　健康社会学研究会　代表　松岡正純
　　ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）当座 〇一九店（ゼロイチキュウ店：店番 019）
　　００４１０２５　ケンコウシャカイガクケンキュウカイ

●平成 23 年度までの会費をこれからご納入の方へ

〒170-8445
東京都豊島区東池袋 2-51-4
帝京平成大学現代ライフ学部
森川　洋 様
平成 23 年度会費払込票在中

封筒の宛名ラベルには、「平成●年度払込票在中」と記載されています。

●平成 23 年度までの会費をこれからご納入の方へ

〒170-8445
東京都豊島区東池袋 2-51-4
帝京平成大学現代ライフ学部
森川　洋 様
平成 23 年度会費納入済

宛名ラベルには、「平成 23 年度会費納入済み」と記載されています（払込票は同封いたしておりません）。